

January 2025

COP29報告書

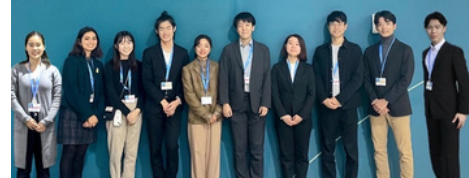
UNFCCC COP29 Baku Azerbaijan
(2024.11.11-24)

ユースが見た
国連気候変動交渉の最前線

青年環境NGO
Climate Youth Japan



Welcome to
COP29 Azerbaijan



Content

1	Climate Youth Japanの紹介	03
2	CYJ and COP	04
3	派遣メンバー紹介	06
4	COP29の論点と結果	10
5	COP29でのCYJの活動	15
6	メンバーの感想と学び	32
7	編集後記	50



What is CYJ?

Climate Youth Japan(CYJ)は2010年春、気候変動問題に高い関心を持って活動しているユースによって設立されたネットワーク型NGO。2024年度は、日本を中心に世界から集まった約50名のメンバーがオンラインで活動しており、年に数回の対面ミーティングや合宿を開催している。

Departments in CYJ

下の図のようにCYJは大きく「政策提言部門」と「Youth Empowerment」に分けられる。政策提言部門では「エネルギー政策」「インフラ政策」「プラスチック政策」「食料システム政策」「政策立案」というように、専門的な分野に分かれ活動している。Youth Empowerment部門では「Youth council」「LCOY」の2つを軸に活動中。気候変動分野でのユースの活動の幅を広げることを目的にプロジェクトを実施。アドボカシーを行うユースの規模拡大のための環境教育・イベント企画に取り組む。

組織図



2

CYJ and COP

What is COP?

COPとは、温室効果ガス排出削減等の気候問題に関する国際的な枠組みや協定を取りまとめるための、最高意思決定機関であり、国際協力の推進と各国の取り組みの監視と透明性を確保する。国連気候変動枠組条約 (United Nations Framework Convention on Climate Change: UNFCCC) が、1995年以降、毎年開催している。

2024年は、11月11日から11月24日(2日延長)にかけてアゼルバイジャン共和国・バクーにて行われた。日本からは、浅尾慶一郎環境大臣をはじめ、外務省、環境省、経済産業省、財務省、金融庁、総務省、文部科学省、農林水産省、林野庁、国土交通省、気象庁及び関係機関が参加した。

What is COY?

COYとは言わば、COPのユース版の会議である。気候変動枠組条約(UNFCCC)の公式ユース組織であるYOUNGOによって、COPの会期数日前にCOPと同じ都市で開催される。COYには、Global COY (GCOY)、Regional COY (RCOY)、Local COY (LCOY)の3種類があるが、ここでは特にGCOYを指す。

2024年のCOY19は、11月7日から9日までの3日間開催され、169ヶ国から400人以上の若者が参加した。COYの主な目的は、Global Youth Statement(GYS)に世界中のユースの意見を集約することだ。このGYSはCOPにてユースの意見として手交される。



2つの会議のスケジュール

11/7~10

11/11~24

COY19
(Conference of Youth)

COP29
(Conference of the Parties)

COP29におけるCYJ

CYJは主に、以下のような目的意識を持ってCOP29に参加した。

【Domestic Purpose】日本ユースの声を国内政策に反映させる

- 日本国内における日本ユースのプレゼンスを向上させる。
- 政府/メディア/企業などに日本ユースの声を届ける。

【Global Purpose】アジアユースの世界における影響力を強化する

- 国際的なユースとの交流を通じて、日本ユースの露出を増やす。
- 日本だからこそ直面する課題感を同じユースの立場から、海外ユースに伝える。

本報告書は、「COP29の論点と結果」と「CYJがCOP29で行った活動の報告」がメインの内容となっている。日本国内のユースの声を幅広いステークホルダーに届けることと、他のユースにとって参考となる情報を提供することが目的である。



3

派遣メンバー紹介

CYJからは、様々なバックグラウンド・関心を持つ10人のメンバーを派遣した。COPとCOYを合わせると派遣期間は合計2週間を超えるため、前半と後半で5人ずつのチームにしている。そのそれぞれのメンバーについて、関心領域やCOPでの活動などを紹介する。

1 週目！



富田 凜太郎

「気候ユースの在り方・意義を探る」
「交渉時における科学技術の役割を探る」

東京大学大学院 工学系研究科技術経営戦略学専攻 修士2年。Youth Engagement と Technology Mechanism に関心がある。CYJでは、COP29 部門統括、企業連携統括を担当。CYJのCOP29部門統括として派遣者を支えることと、気候ユース存在意義の考察を深化させることに注力した。特に前者は目的意識の明確化に努め、後者はユースの動機づけと社会的役割の間にあるギャップに焦点を当てた。



豊田 さら

「新興国、途上国のリアルな声を聞く」
「国際協調実現において気候変動問題の取り組みがどう作用しているのか」

慶應義塾大学 総合政策学部 4年。国際関係と気候変動の相互作用について関心がある。CYJではエネルギー、インフラ、プラスチック部門に所属。COPでは、関心のあったエネルギー移行におけるリスク、とくに地政学リスクが国外では問題視されているのか、どのように議論されているのかについて知るために、セッションの開催、パビリオンへの参加を中心に活動。

関口 政宗



「海外ユースの環境活動の動機」

「日本の交渉での立ち位置の一次情報の取得」

東京大学大学院 新領域創生科学研究科 修士1年。日本のエネルギー政策や海洋開発、特に浮体式洋上風力に関心がある。CYJではエネルギー政策の統括を行い、第6次エネルギー基本計画を始めとして幾つかの提言書を省庁に提出。COPでは、youth engagement /council に関するアンケート調査、並行してImplementation of the response measureという交渉議題の進捗を特に追いかけた。加えて、CYJ主催の「エネルギー移行と地政学リスク」のイベントに登壇し、ウガンダ、メキシコ、ベルギーのユースと議論した。

高橋 櫻



「島嶼国や炭素市場に関するイベント参加と意見交換」

オーストラリア国立大学 気候科学専攻・地理学副専攻 3年。炭素市場、6条、NbS、SIDS(小島開発途上国)、地球観測などに関心がある。元会計統括、COP27派遣者。CYJでは、勉強会運営、海外ユースとの連携などに取り組む。COP29では、島嶼やNbS (Nature-based Solutions) に関するセッション見学、パリ協定6条の交渉傍聴やワークショップに参加。また、中国パビリオンとGAUCパビリオンにてユースの環境活動に関するセッションに登壇し、CYJの活動を紹介した。

山本 りら



「気候危機と生物多様性損失の相互作用を
国際的な視野で学ぶ」

国際基督教大学卒業。生物多様性と気候変動の関係性に関心がある。特に、食料システムや生態系と人間いずれにも利益をもたらす方法で社会的課題を解決するNature-based Solutions (NbS)に関心がある。専門分野とを繋がったり生物多様性に関連するセッションに参加した。COP29の前に行われたCOYでの世界中のユースと交流ができたことが印象に残っている。



山田 健二

「ユースの気候変動問題への動機づけを集める」
「V2GやCEに向けたビジネス・行政の難所を明らかにする」

東京大学 大学院工学系研究科 技術経営戦略学専攻 修士1年。
EVの電力グリッドへの活用やサーキュラーエコノミー関連のビジネスに関心。
CYJではInternational Conference 準備会統括を担当。
COPでは韓国パビリオンにて他国のアジアユースと共に登壇。気候資金やユース活動に関して発表・議論。
パビリオンではアメリカ・中国の国が先導する姿勢が印象に残っている。



加藤 弘人

「気候変動に関して各国が持っている論理を知り、
日本の政策を相対化する」

一橋大学大学院 経済学研究科 修士1年。Climate Justice, Just Transition, Climate Resilienceに関心がある。CYJでは 会計統括を担当し、エネルギー政策提言チームに所属している。COP29ではClimate Resilienceに関するシンガポールパビリオンで登壇。海外のユースや交渉官と交流し、普段あまり関わる機会がなかった国々の気候変動に対する捉え方を学び、自分自身の日本に対する印象も変化した。



金武 朝陽

「バイオエコノミーのために、
トップダウンでどこまでできるのかを学ぶ」

ホーエンハイム大学 バイオエコノミーコース 修士1年。Loss&Damage基金、国家適応計画(NAP)、農業・経済学・バイオエコノミーに関心がある。CYJでは関西チーム代表を担当し、ISAP(持続可能なアジア太平洋のための国際会議)2023 登壇、その他関西を中心に出展や登壇の経験あり。環境省・IGES主催のジャパンパビリオンに登壇し、国際会議におけるユースの役割について発言。また、各国パビリオンではユースの守りたいもの」を聞いて周り、固有の文化や暮らしなど、足るを知る回答が印象に残っている。

中嶋 彩香



「AFOLU分野の気候変動対策について学び、考えたい」

東京大学 理科2類 2年。(来年度より農学部応用生物学専修に進学予定)
AFOLU(農林業その他土地利用)、特に農業由来のGHG排出削減に関心がある。
CYJでは勉強会の開催や省庁への提言、会計業務を担当。
COPではジャパンパビリオンにてCYJが共催した「ネイチャーポジティブな都市づくりのための環境教育」というイベントにて登壇し、日本のクライメートリテラシーの現状について共有した。農業に関連するイベントに多く参加し、農業分野の気候変動緩和・適応に貢献している方々と交流した。

和田 優希



環境政策における立案から実施に係る

「コミュニケーション」の在り方を国際交渉の場で学ぶ

奈良女子大学 理学部 4年(環境科学専攻)。気象予報士の資格を持ち、異常気象の発生メカニズムやEWSなどの適応策、環境政策の有効性を高めるための方法論などに関心がある。CYJでは政策提言部門の統括としてエネルギー基本計画や環境基本計画などの提言に携わる。COPでは、韓国パビリオンでの日米韓協力に関する発表、パリ協定6条の交渉の視察、パビリオンエリアにおける他国の気象予報の現状についてのインタビューを行った。

このセクションでは、COP29での議論の主なポイントとその結果について紹介する。COP29においては、2つの柱として「野心を高め、行動を可能にする」を意味する“Enhance Ambition, Enable Action”というビジョンが掲げられた。

“Enhance Ambition”という軸では、パリ協定の原則に沿って、締約国が削減目標や国家適応計画、透明性報告書に関して、野心的に行動する決意を示すことを目指した。“Enable Action”という軸では、気候資金の数値目標に合意、炭素市場の運用化の実現、損失と損害基金の運用の決定など、迅速な行動が必要であることを再認識し、行動を開始することを目指した。

以下に、その概要を6つのトピックに注目して紹介する。

a. Enabling Action

1

Finance and NCQG

(NCQG = New Collective Quantified Goal on Climate Finance)

2025年から3000億ドル、2035年までに1.3兆ドルで合意

気候資金に関する新たな合同数値目標（New Collective Quantified Goal、以下NCQG）は、2025年以降の新たな気候資金の目標のことで「Finance COP」とも称されるCOP29の最大の論点であった。気候資金とは、各国のNationally Determined Contributions（NDCs）の達成に向けた緩和策や、洪水や干ばつなどの気候変動の影響に対応する適応策を支援するため、主に発展途上国に対して先進国が提供する資金を指す。これは、気候変動枠組条約における「共通だが差異のある責任（CBDR）」の原則に基づき、先進国に課された義務として位置付けられている。

2025年までの先進国の気候資金目標額は年間1,000億ドルとされていたが、今回のCOP29では、発展途上国が求める年間1兆ドルという目標にどこまで近づけるかが注目された。交渉は非公開で進められた。最終日前日の11月21日時点で提示された交渉文書では、年間目標が「X trillion」と具体的な金額が定まっておらず、さらに資金提供の主体についても、主に先進国の公的資金に限定する案と、民間資金を含める案が併記されており、合意が難航している様子が見られた。その後、11月22日に提示された交渉文書では、官民を合わせて2035年までに最低年間1.3兆ドルに規模を拡大することを最終目標とし、それまでは年間2,500億ドルを合同目標とする案が示された。最終的な合意では、年間3,000億ドルを供与することが合同目標として採択された。しかし、この合意に対してインドやナイジェリア、マラウイなど多くの発展途上国が不満を表明し、合同目標の内容に関する議論が引き続き求められている。

パリ協定第6条の完全運用化に合意 温室効果ガス削減・除去クレジットの国際取引が本格化

パリ協定6条は、温室効果ガスの排出を削減した量をクレジットとして国際的に取引する仕組みを規定するものである。締約国が協力して温室効果ガスの排出削減プロジェクトを実施することで得られた追加的な排出削減等のクレジットを、国や企業等で分配・移転できる仕組みだ。獲得したクレジットは、締約国のNDCの達成や企業の排出削減目標などに活用することができる。この仕組みによって、より効率的で追加的な排出削減を促すことが目的となっている。

この6条は、2015年のCOP21でパリ協定的一条項として採択され、2021年のCOP26で基本的な実施規則が合意された後、運用ルールの詳細をめぐる議論が続けられてきた。COP29では、クレジットの移転をする際に必要な政府の承認、報告、登録簿（クレジットの情報を追跡・記録するためのもの）などに関して、細かい規則が決定し、完全運用化に合意がなされた。

なお、透明性や環境十全性（環境負荷を下げる仕組みとしての完全性）についてなど懸念が残る点もあるため、今後はそれらを十分に考慮しながら運用をしていく必要がある。

ロスダメ基金運用開始、資金額は未だ不十分

「損失と損害」（Loss and Damage）に関する議題においては、ロスダメ基金（FRLD）に関する議論が中心となった。ワルシャワ国際メカニズム（WIM）ならびにサンティアゴネットワークに関するレビューが実施されたが、具体的な行動計画や資金提供の詳細については2025年に持ち越された。

資金に関しては、2025年から開始の方針が公表された。特に脆弱な小島嶼開発途上国（SIDS）や後発開発途上国（LDC）などにおける、気候変動により影響が増す異常気象・海面上昇、またそれを起因とした気候難民など様々な課題への対処に使われる予定である。制度に関しては、基金の体制整備の進捗等が確認され、事務局がフィリピンに決定した。

同基金に対して、2024年12月時点で約束されている資金拠出は総額で7.5億ドル程度に止まっており、世界各地で甚大な自然災害が多発しているなか、十分な支援ができるとは考えにくいことが懸念される。

NCQGにサブゴールとして損失と損害の目標を入れることが期待されていたが、そのような決定は行われなかった。今後、損失と損害という概念のさらなる明確化や資金動員の充分性を確保することが期待されている。

b. Enhancing Ambition

4

NDCs and Mitigation

(NDCs = Nationally Determined Contributions)

資金/緩和の観点で合意取れず、2025年のNDC提出を待つ。

NDC提出期限である2025年2月10日を目前に迎えたCOP29、開催期間に合わせて各国からNDC目標が着々と提示されていた（日本は具体数字は期間中は提示せず。）そんな中、フォローアップ期間に突入したGST、交渉内容としては、COP28にて設置が決まった「GSTの成果の実施に関するUAE対話」の詳細を詰めることであった。結果、資金・緩和の論点を含めるべきかで合意することができず、採択されなかった。

なお、現地ユースオブザバーン間ではNCQGがより注目を浴びていたこともあり、そもそもGST交渉はあまり目立った論点として挙がっていなかった。むしろ、GST交渉はNDC評価に直結するため今後も動向を追いつつも、自国のNDC決めを見据えて活動していると述べる方々が多数を占めた。まさにこれを執筆する今、日本でも2035年次NDCに向けてパブコメを提出したい人ができるようにパブコメ提出方法を教える講座が増えている印象である。国際/国内同時並行で議論が進む点がGST/NDC議題の特徴かもしれない。

5

NAPS and Adaptation

(NAPS = National Adaptation Plans)

適応目標に途上国の主張が大きく反映、COP30にも期待

COP29では、UAEベレン作業計画に基づく、GGA(適応に関する世界全体の目標)達成に向けた進捗評価手法に関しての本格的な議論と、現状は緩和に偏っている気候資金の配分を是正するために、NCQGにおいて適応への資金配分を定めるサブゴールが設定されるかどうか焦点となっていた。結果として、GGA達成の評価指標の方針に関しては、途上国側の主張が大きく反映された。グローバル指標を優先して指標の数を絞り、必要に応じてMoI(資金・技術支援や能力強化の進捗度合いを測定する)指標を含むことが決定された。

さらに、評価指標について現在協議しているUAEベレン作業計画が終了する2025年のCOP30の後には、GGAに関する取り組み促進を目的としたバクー適応ロードマップ(BAR)の立ち上げること、UAEフレームワークの実施促進に向けたバクー・ハイレベル対話を毎年開催することが決定された。しかし、NCQGに適応への資金配分のサブゴールは設定されなかった。

(BTR = Biennial Transparency Reports)

隔年透明性報告書が稼働し、気候変動対策の透明性が向上

隔年透明性報告書（BTR）とは、COP24で運用化が決定した「強化された透明性枠組み（ETF）」の実施のための報告書で、国が決定する貢献（NDC）達成の進捗状況や条約下の取り組みに関して報告する。特に、NDCの達成度合いを評価し、グローバルストックテイク（GST）を作成するための情報として活用され、GSTによって新たなNDCが策定されるというサイクルの重要な役割を担っている。BTRでは、各締約国の能力に応じて必須となっている記載内容が異なり、柔軟性と実効性のバランスをとっている。

初めての提出期限が2024年12月31日となっているが、BTRの前身である、隔年更新報告書（BUR）では、報告書作成能力が不足する国家は提出できないという問題が目立った。しかし、今回の報告書には報告できないことを許容する柔軟性の要素が加えられ、提出しやすくなったことにより、各国で提出しようとする動きが強い。

一部国家がCOP29前や期間中にBTRの提出を行ったり、気候行動へのアピールがハイレベルフォーラムなどで行われた。また、今回の議長国であるアゼルバイジャンは、途上国のBTR作成を支援するための「バクー世界気候透明性プラットフォーム（BTP）」を立ち上げた。BTRは今後、単なる報告書としての役割だけではなく、企業のサプライチェーン全体における排出量の可視化などにも活用されることが期待される。

コラム

ボランティアのレベルが高い



ボランティアのレベルの高さに圧倒されました。英語が流ちょうに話せる現地大学生が中心となって活動してくれている印象でした。空港に到着した瞬間から最終日まで、少しでも迷っている素振りを感じると話しかけてくれましたし、何を聞いても親切丁寧に対応してくれたので、慣れない環境でも安心して過ごすことができました。駅構内で私の重い荷物を運んでくれたり、日本の文化に親しみを持って話をしてくれる方までいたり、心温かい皆さんのおかげでアゼルバイジャンのことを大好きになりました！こういったさりげない振る舞いが国の印象に影響を与えるので、自分のふるまいを見直し、おもてなしの精神を大事にしようと感じました。

（豊田）

【参考文献】

- Ota, H. (2024). 気候変動対策における地域的アプローチ. IGES. Retrieved from https://www.iges.or.jp/sites/default/files/2024-12/20241206_Ota.pdf
- IGES. (2024). イベント「気候変動と持続可能な開発」概要. Retrieved from <https://www.iges.or.jp/jp/events/20241015>
- UNFCCC. (n.d.). Introduction to Climate Finance. Retrieved from <https://unfccc.int/topics/introduction-to-climate-finance>
- UNFCCC. (n.d.). Introduction to Climate Finance. Retrieved from <https://unfccc.int/topics/introduction-to-climate-finance#:~:text=Climate%20finance%20refers%20to%20local>
- WWFジャパン. (2024). 国際的な気候変動への取り組み. Retrieved from <https://www.wwf.or.jp/activities/activity/5766.html>
- UNFCCC. (2024). First NDR Summary Report. Retrieved from https://unfccc.int/sites/default/files/resource/54307_2%20-%20UNFCCC%20First%20NDR%20summary%20-%20V6.pdf
- Vetter, D. R. (2024, November 24). Developing nations and nonprofits reject ‘disaster’ COP29 climate deal. Forbes. Retrieved from <https://www.forbes.com/sites/davidrvetter/2024/11/24/developing-nations-and-nonprofits-reject-disaster-cop29-climate-deal/>
- NIES. (2024). 気候変動適応プラットフォーム: COP29概要. Retrieved from https://adaptation-platform.nies.go.jp/climate_change_adapt/cop/cop29/summary/01.html
- NIES. (n.d.). 気候変動適応プラットフォーム: COPの取り組み. Retrieved from https://adaptation-platform.nies.go.jp/climate_change_adapt/cop/index.html
- UNFCCC. (n.d.). Transparency in Negotiations. Retrieved from <https://unfccc.int/transparency-negotiations>
- UNFCCC. (2024). Document ID 643727. Retrieved from <https://unfccc.int/documents/643727>
- UNFCCC. (2024). Document ID 643550. Retrieved from <https://unfccc.int/documents/643550>
- IISD. (2024). Summary of Baku UN Climate Change Conference (COP29). Retrieved from <https://enb.iisd.org/baku-un-climate-change-conference-cop29-summary>
- COP29 Media Hub. (2024). News Update. Retrieved from <https://cop29.az/en/media-hub/news/-1732385682>
- IOM. (2024). Loss and Damage Fund Operationalized at COP28. Retrieved from <https://lac.iom.int/en/news/loss-and-damage-fund-operationalized-cop28>
- IGES. (2024). COP29速報セミナー. Retrieved from <https://www.iges.or.jp/jp/events/20241206>

5

COP29でのCYJの活動

「COP29」では様々なイベントが行われる。CYJの派遣メンバーもこれらのイベントそれぞれにおいて多様な活動を行ってきた。

このセクションでは「COP29」へ派遣されたCYJのメンバーが現地で行った実際の活動を詳細に報告する。以下の図で活動の全体像を示している。このページ以降では、特にパビリオンでの登壇と視察を中心に報告していく。



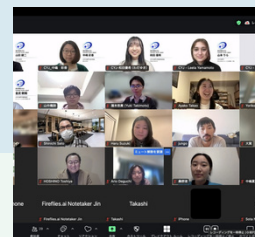
派遣前

- ・事前勉強会(※)
- ・バッジの取得
- ・助成金の獲得



派遣中

- ・おもな活動は下図に記載
- ・関係者の皆様との意見交換



派遣後

- ・報告会の開催
(リンクは[こちら](#))
- ・報告書作成



【パビリオンゾーンなど】

- ・パビリオンでの**登壇**
- ・パビリオンの**視察**
- ・海外ユースとの**ネットワーキング**

【交渉ルームなど】

- ・**交渉**やサイドイベントの傍聴

※IGES(地球環境戦略研究機関)の方をお招きして、共同勉強会も実施。

COP29での活動一覧

1. パビリオンでの登壇 p16

- 「ユースの力で気候変動に挑む」(高橋、山本)
- 「各国視点の『地政学リスク』」(関口、豊田)
- 「交渉で注目された気候資金をユースの視点で」(山田)
- 「国を超えた取り組みの重要性」(和田)
- 「各国のレジリエンスを共有する“Library”」(加藤)
- 「次の世代へつないでいく」(中嶋)
- 「若者こそシナジーを深く理解すべき」(金武)

2. パビリオンの視察 p27

- アゼルバイジャンパビリオン「開催国だけれど...」(富田)
- キルギスパビリオン「山岳地帯の気候変動」(加藤)
- Oceanパビリオン「日本のユースが関わっていない」(関口)
- エチオピアパビリオン「コーヒーを片手に」(和田)
- IICAパビリオン「農業と食を考える」(中嶋)
- 中国パビリオン「独自の発信と集客の工夫」(山田)

3. 新聞社やテレビを通じた発信 p30

4. SNSでの発信 p31

1. パビリオンでの登壇

ここでは、各メンバーが活躍した登壇の内容について報告する。COP29では、CYJと以前より交流のあった団体にお声がけをいただくなどして登壇の機会を得ることができた。

登壇したパビリオン、テーマは多岐にわたっている。以下に、イベントごとの登壇報告をまとめていく。

ユースの力で気候変動に挑む



「ユースの環境活動の影響拡大」

GAUCパビリオン

(The Global Alliance of Universities on Climate)

高橋、山本

ー日本におけるユースカウンスルの重要性

日本、イギリス、スウェーデン、パキスタン、カンボジアのユースが参加し、それぞれの環境活動の紹介とパネルディスカッションを行った。高橋は日本ユースとして、CYJの活動を、山本はイギリスユースとして、Plant-Based Universitiesの学生キャンペーンとBritish Ecological SocietyのCASCADEネットワークについて共有した。

高橋の発表では、CYJで行っている政策提言やユースエンパワメント事業の紹介をした。特に、ユースの声を政策や政治に確実に反映するためのユースカウンスルの重要性を強調した。気候変動の影響を長期間にわたって受けるユースの声を取り入れた公平な政策を実現するためには、法的実行力のある組織が必要不可欠であると考えて活動をしていることを伝えた。

ー ユース発で大きな組織の変革を目指す

山本の発表では、Plant-Based Universitiesというキャンペーンを紹介した。このキャンペーンはイギリスを中心とした世界中の大学が100%プラントベースのケータリングに移行することを目指し、学生が大学の運営組織に働きかけて変化を促すことを目的としている。また、生態学の研究に携わる科学者らでアクティビストのコミュニティを形成する目的でCASCADEネットワークを現在設立中である。

これらはいずれもユース発のプロジェクトであり、アクティビズムのスペースに学生と科学者を積極的に巻き込むことを活動の軸としている。いずれのプロジェクトも、大学や科学機構といった権威のある顕著な組織に対してシステムチェンジを求める取り組みである。

パネルディスカッションでは、ポジティブ思考の重要性やユースだから可能なこと、自らの経験に基づくお互いの活動へのアドバイスをを行った。本ディスカッションで得た知見を今後のCYJの活動に活かしたい。このサイドイベントを通して、LCOYやGYBNで活動するパキスタンユース、ユースエンパワメントに取り組むカンボジアユース、ユース対象の交渉官を育成するプログラムを運営するスウェーデンユースと有意義なコネクションを築くことができた。

コラム



水代は要らないけれど...



会場には夥しい数のウォーターサーバーが置いてあった。一本の道の両側に3メートル毎に1個置いてあるレベルであった。会場内で飲み物を買うと非常に高つくので、ウォーターサーバーがあるのはCOP現地参加者にとって非常にありがたいことなのだが、こうも多いと「これだけのウォーターサーバーを作る際に生じる環境負荷はどれくらいだろうか、COP閉幕後は全てゴミとして処分されてしまうのだろうか」と思ってしまふ。あのウォーターサーバーたちが今も有効利用されていることを切に願う。

各国視点の「地政学リスク」



“How Can We Sustain the Acceleration of Energy Transition? ~ As Youth, from the Perspective of Energy Security ~”

GAUC パビリオン
関口、豊田

一異なるエネルギー供給の方法からみる地政学リスク

GAUCパビリオンにおいて、「How Can We Sustain the Acceleration of Energy Transition? ~ As Youth, from the Perspective of Energy Security ~」という名目で、エネルギー移行における地政学リスクについて共有し、それをユースが考える意義についての議論を行う場をつくった。

COYを通してSNSでのネットワーキングを中心に、この分野について興味のある海外ユースを募ったところ、CYJメンバーに加えてウガンダ、メキシコ、ベルギーの学生が登壇に応じてくれた。それぞれが自国の再生可能エネルギーの普及状況、抱えている地政学リスクなどに関して共有した。気候変動問題に対してそれぞれの参加者が関心を持っている観点は生物、風力、人権など多岐にわたっていた。加えて、それぞれの国のエネルギーの供給方法は異なる特徴を持っていたために、「地政学リスク」というテーマ一つにおいても、新しい発見や考え方を知ることができた。日本国内外のユースとの協同の意義はここにあると思う。

一エネルギー移行の先にあるリスクまで考える

一方で、地政学リスクについて学ぶ機会は充分ではなく、ユースが地政学リスクを認識する必要があるという参加者の声が多かった。加えて、COYでも相当する議題のレクチャーなどは殆どなかったことから、気候変動の移行リスクについて理解する機会が少ないという問題が日本国内だけではなく世界でも共通していると言える。

私たちユースの声をより実現性のあるものとして日本国内や世界に発信し、相手との対話に繋げるためにも、炭素排出削減量や気候資金などの目標を引き上げる役割を果たすと同時に、移行した先にあるリスクにどう対処すべきかをユースが考えるきっかけづくりが必要であると感じた。

交渉で注目された気候資金を ユースの視点で



「Asian Youth Dialogue on Climate Finance “NCQG”」

韓国パビリオン

山田健二

ー各国の気候資金に関わる状況を共有

山田は韓国パビリオンで行われたイベント「Asian Youth Dialogue on Climate Finance “NCQG”」にて登壇をした。このイベントは、韓国のユースNGOである Green Environment Youth Korea (GEYK)が主催し、CYJとしても近年継続して参加しているものである。登壇者として、山田のほかに韓国、ベトナム、香港のユースが参加した。

イベントは2つのパートに分かれており、前半では各国の気候資金や国内の気候変動対策への投資促進、ユースの活動について紹介し、後半ではそれをもとにパネルディスカッションを行った。

ー日本の政策には量と質から改善が必要

前半パートでは、日本がこれまで発展途上国支援を積極的に行ってきたこと、NCQGの大幅な増加において従来の手法を踏襲するだけでは不十分であり、量と質の両面で改善が必要であるという山田個人の考え、そしてCYJの取り組みについて紹介した。

韓国ユースは、韓国独自のタクソノミーであるK-Taxonomyの分析を紹介した。タクソノミーとは「分類体系」を意味し、気候変動の文脈では「グリーン（持続可能な）経済活動を分類し、その基準を明確化する枠組み」として理解される。EUタクソノミーは広く知られているが、日本にはタクソノミーの定義が存在しない。これは、明確にグリーンなプロジェクトを定義してしまうと、トランジションプロジェクトへの投資が後退する可能性があるためだと私は理解している。

また、ベトナムと香港のユースからも、それぞれの国内における気候変動対策の資金について紹介があった。

ーCYJの活動の着眼点が国内に閉じている

後半パートでは、気候資金や各国の気候変動投資についてパネルディスカッションが行われた。中でも印象に残ったのは、ネパール人のオーディエンスからの「ユースの活動として気候資金や適応に関する政策提言を行っているか」という質問である。CYJではこれまで緩和、特にエネルギー分野における政策提言を主軸としており、活動の着眼点が国内に閉じていることに気づかされた。この問いをきっかけに、団体内のリソースを考慮しつつ今後の活動方針を検討する良い手がかりを得たと感じている。



国を超えた取り組みの重要性



「Youth Green Alliance ～日米韓の協力～」

韓国パビリオン
和田優希

ー気候変動適応に日米韓で協力する

和田は韓国パビリオンで行われた「Youth Green Alliance」というイベントにおいて「日米韓協力」というトピックで登壇を行なった。日本・アメリカ・韓国のユースが参加し、それぞれ登壇とパネルディスカッションを行なった。私は「日米韓協力と気候変動適応 ～各国の強みを活かした自然災害対策～」というテーマで登壇を行なった。

ーアジア太平洋地域の適応能力の向上に向けて

地理的条件から自然災害が発生しやすいアジア太平洋地域において、災害に対する防御耐性が整っていない国も多く、気候変動に対する適応能力が足りていない地域がある。そこで、技術開発や研究面において先進的である日米韓が協力して、気候変動による自然災害の増加と激化に適応するための基盤を作ることが重要であると述べた。具体的には、日本が持つ「災害予測精度の高さ（早期警戒システム等）」・アメリカが持つ「気象衛星技術」・韓国が持つ「デジタル管理システム」を活かして、3カ国で衛星観測データをシェアしてアジア太平洋地域全体の災害予測を行うプラットフォームを作り、台風や豪雨などによって危険が予測される該当地域の住民に対してスマートフォンなどを通して注意勧告ができるような仕組みを作ること提案した。他にも、局地予報ができるように「気象レーダー」の設置にかかる資金支援や気象予報の技術移転を行うことが必要であるという提案を行なった。

ー非政府アクターが国境を越えて協力する

アメリカと韓国のユースからもそれぞれ3カ国が協力して気候変動問題に取り組む意義などについて発表があり、登壇後には自国のお菓子をプレゼントし合うなど文化交流もすることができた。

この登壇から、気候変動問題への対策は政治的な動向や経済的な問題によって遅らせてはならないものであるからこそ、非政府セクターが国境を越えて協力することの重要性を再認識することができた。そしてユースはその流れを後押ししていく必要があると感じる。その使命感を胸に、これからも他国のユースと交流を続け、共に問題の解決に向けて励んでいきたい。



各国のレジリエンスを共有する“Library”



“Human Library: Youth Stories from the Climate Frontlines”

シンガポールパビリオン
加藤弘人

一 気候変動に関する活動をする若者の声

加藤は、シンガポールパビリオンで行われた「Human Library: Youth Stories from the Climate Frontlines」というイベントに登壇した。シンガポールのサステナビリティ・環境大臣兼貿易関係担当大臣であるGrace Fu氏や、COPでのユース参画を促すために作られたYouth Climate Championの代表であるLeyla Hasanova氏も参加しており、会場は盛況であった。

一 日本のレジリエンスは高いが、アップデートも必要

私の他にタイ、ブラジル、オーストラリアから若者が登壇し、気候変動に興味を持ったきっかけや、それぞれの国における気候変動の影響、レジリエンスについて発表をした。私は、日本は災害が昔から多かったため災害対策はある程度進んでおり、防災意識も比較的高いということに注目してレジリエンスの話をした。しかし、将来にかけて気候変動の影響は日本でも大きくなる可能性が高いことを踏まえ、適応に関する政策もアップデートする必要がある、CYJも政策提言のトピックに適応を入れるなどして貢献したいということ述べた。

一 登壇者を本に見立てて対話を行う

登壇の後はHuman Libraryという形式で会場の人を巻き込み、双方向型の対話の時間が設けられた。Human Libraryとはファシリテーターが「司書」としての役割を担い、登壇者を「本」に見立てて対話を促進するという形式のイベントである。今回はシンガポールのユースがファシリテーターを担当し、登壇者の人数分である4つのグループに分かれて対話を行った。私のグループでは、日本の若者の気候変動に対する意識についてや、日本の気候変動教育についてなどの話題が出て、大変活発な議論がなされた。



コラム

みんなでお茶を飲む



1番最後の大会議の前、カナダから来られた方が会場の端で茶道をされていました。アマゾンの先住民族伝統のお菓子と、日本のお抹茶、そして約100年前の黒楽茶碗を、略式のお点前でいただきました。時代や地域を超えて、一期一会の美を次世代へ残すのだという意思を感じました。

私のCOPに行く目的のひとつに「みんなでお茶を飲む」というものがありました。異文化交流の中でお互いに創造的なアイデアを生み出すことを意図していた訳ですが、まさか抹茶で体現できるとは驚きでした。

(金武)

次の世代へ繋いでいく



「ネイチャーポジティブな都市づくりのための環境教育」

ジャパンパビリオン
中嶋彩香

ーネイチャーポジティブと環境教育を考える

中嶋はCOP29のジャパンパビリオンで行われたイベント「ネイチャーポジティブな都市づくりのための環境教育/Climate Education for Building Nature-Positive Urban Communities」に登壇した。このイベントは、「未来の主人公となる20代の若者を支援し、持続可能な社会を実現することを目指す」一般社団法人SWiTCHが主催し、CYJが共催したものである。登壇者にはスウェーデン、ウガンダ、ウクライナ、メキシコのユースが参加し、多国間での視点が共有された。

ークライメートリテラシーの現状を共有

イベントは二部構成で行われ、私は第一部で日本におけるクライメートリテラシーの現状について紹介した。また、同じく第一部ではフューチャー・アース日本委員会（FE）から「10 New Insights in Climate Science/気候変動について今伝えたい、10の重要なメッセージ」が共有され、続いて各国の登壇者がそれぞれのクライメートストーリー（気候変動に興味を持ったきっかけや活動内容、国ごとの気候変動の影響）を発表した。来場者が自身のストーリーを共有する時間も設けられており、非常にインタラクティブな形であった。

第二部では、スウェーデンユースが生物多様性損失について解説したほか、SWiTCHが行った「ゴミを使ったアート制作」という新しい環境教育の取り組みの紹介も行われた。また、Zoomを通じて日本の小学生や高校生が海外のユースに質問を投げかける時間も設けられ、国際的な交流が図られた。

ー強い意志を持って活動しているユースに感銘

今回の登壇を通じて、特に気候変動の影響を強く受けている国のユースが「現状を変えたい」という強い意志を持って活動している姿勢に深く感銘を受けた。同時に、彼らとの気候変動対策に対する捉え方や基本的な考え方の違いも強く感じ、全世界の人々が協力して問題解決に向かうことの難しさも痛感した。

若者こそシナジーを深く理解するべき



「国連環境総会(UNEA)シナジー決議をCOP29で進展させる」

ジャパンパビリオン
金武朝陽

ーシナジーで対策を加速させる

環境省・地球環境戦略研究機関(IGES)が主催した、ジャパンパビリオンの「国連環境総会(UNEA)シナジー決議をCOP29で進展させる」というイベントに登壇して、若者の視点からシナジーについて発言した。登壇者には、IGES、COP28UAE、UNESCAP、ADBの方が来られ、開会の辞では浅尾環境大臣も発言された。

「シナジー」とは、気候変動、環境汚染、生物多様性などに取り組む際、それぞれが個別の問題としてあるのではなく、相互作用し合っていることを指す。

議会では別々の議題として語られることが多い課題を、「シナジー」として取り組むことで、さらにそれぞれの対策も加速させるということである。

以下に、登壇内容の要約を挙げる。

ーユースの強みである「情熱と時間」を全投入する

シナジーの良いところは、それぞれの複雑な問題を、シンプルな1つの形で表現することで、大きな影響を作ることだと考える。その点における若者としての課題は、そのシンプルな記述の裏にある複雑な問題を理解することである。

例えば、サーキュラーエコノミーに取り組むと一言に言っても、その裏では、資源生産・製品製造・マーケティング・廃棄と、多くの知識や経験が必要になる。

だからこそ、ユースの強みである『情熱と時間』を全力で投下して、その裏にある複雑な論理を理解したり、実際に現場に足を運んで現地の人から学んだりすることが重要である。

その上で、シンプルで影響力のある『シナジー』としてアウトプットできたら大きな結果を生めるはずだ。

ーユースがCOPに参加することでシナジーを生み出す

錚々たる登壇者の中、ユースに登壇機会をくださったIGESの藤野様に最大限の感謝の意を示すと同時に、ユースが日本からCOPに来ているからこそその「シナジー」を作らないといけないと感じた。研究も、活動も、英語も、さらにEnhance Ambitionだ。

2. パビリオンの視察

アゼルバイジャン パビリオン (富田)

開催国だけれど…

Azerbaijan パビリオンは開催国ということもあり最大規模のブースを用意していた。特にアゼルバイジャンは紅茶が有名ということで、現地ブランドであるAZERCAYを現地の民族衣装を着た方々が配っていた。しかし国としての取り組みや目指す方向性を知る場所があまり無いのは少し残念だった。アゼルバイジャンは本当にCOP開催地に適していたのだろうか。



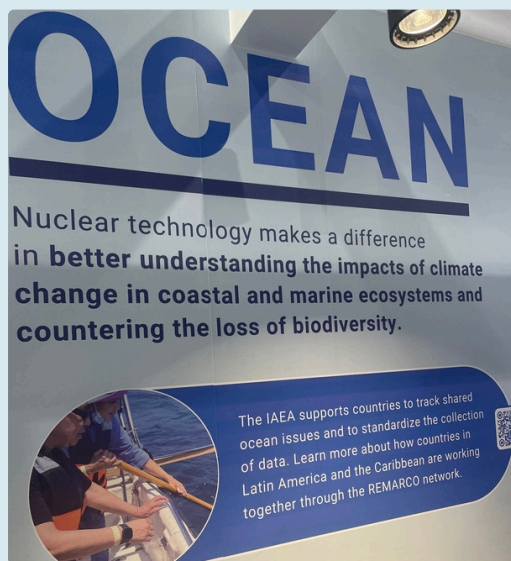
キルギスパビリオン (加藤)



山岳地帯の気候変動

キルギスパビリオンは、その中に伝統的な家屋である「ユルタ」を再現しており、行き交う人の目を惹きつける展示をしていた。中央アジアの内陸国であるキルギスは山岳地帯の持続可能な発展を重要視しており、展示やイベントの内容も山岳地帯に関わるものが多くなっていた。気候変動の山岳地帯への影響は適応の分野で注目され始めており、同じく高山帯を有するパキスタンなどと共に支援の必要性を力強く訴えていた。

Ocean パビリオン (関口)



日本のユースが関わっていない

Ocean パビリオンについて紹介する。本パビリオンはCOP26から立ち上がり、いくつかの財団や企業などが協力して運営を行っているが、面積はあまり大きくない。日本の笹川平和財団もイベント運営に協力していた。そのため、独自のアプリがあるなど他のパビリオンとは異なる特徴があった。イベントの内容は、生物多様性、経済、ユースが大きなトピックだった。しかし、日本ユースが一切関わっていないのは問題であると感じた。今後は関われるようにしていきたい。

エチオピア パビリオン (和田)

コーヒーを片手に

エチオピアパビリオンでは、その場で国産の豆からコーヒーを作り、伝統的な陶器に注いで、立ち寄った人に提供していた。そのコーヒーがものすごく美味しかったのと、ウェルカムな国民性に惹かれ、毎日通ってコーヒーを片手に、エチオピアにおける環境活動や考え方についてたくさん学んだ。

エチオピアでは今年、内燃機関自動車の輸入が全面禁止され（世界初）、EVの普及が急速に進んでいるという話を聞き、日本には見られない環境政策のスピード感にとっても驚いた。他にも、エコツーリズムで「観光客の増加と地球環境の保護」をどちらも推進するような取り組みも進めていて、自国の発展と環境共生を両立させようとしている所がとても良いなと感じた。



IICA パビリオン (中嶋)

農業と食を考える

IICA(Inter-American Institute for Cooperation on Agriculture) パビリオンとAction on Food パビリオンについて紹介する。二つのパビリオンは隣り合っており、農業や食料に関するトークイベントを約90分ずつ交互に行っていた。

登壇者の方との距離も近く、イベント後にはウルグアイやジャマイカの農林水産省大臣に当たる方とお話ができ、他国における農業と気候変動の関係性の捉え方など、非常に学びになった。



中国パビリオン (山田)

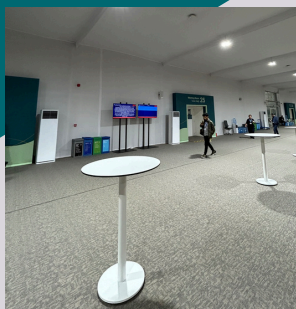


独自の発信と集客の工夫

中国パビリオンは独自のテーマ設定による発信と、集客の工夫の両面で印象的だった。日ごとに異なるテーマを設け、例えばサーキュラー・エコノミーでは政府の取り組みや企業の成功事例が紹介され、製品設計やビジネスモデルについて活発な議論が行われた。日本の3Rを中心とした議論と比べより幅広い視点の重要性を実感した。

習字体験やパンダのグッズ配布等、文化的要素を取り入れた集客の工夫も印象に残った。日本パビリオンは技術展示を中心としていたが、中国パビリオンのように来場者を惹きつける工夫も重要だと感じた。

コラム



エスカレーターは右立ち

会場は椅子や机の数が少なく、特に交渉ルームの周辺では多くの人が床に座って作業したりご飯を食べたりしていた。壁に沿って座るので、近くに座っている人とプチトークや名刺交換ができた。会場が大きすぎると移動などが大変だと聞いたため、今回のサイズはちょうど良かったのではないかなと思う。そしてアゼルバイジャンではエスカレーターが右立ちだった。やはり西(日本中心のメルカトル地図上で)は右立ちということであろう。(By 関西人)

(和田)

3. 新聞社やテレビを通じた発信

一 気候変動に対してしてメディアは何ができるか

CYJではCOP派遣前から新聞記者の方々を中心としたメディア関係者とコミュニケーションを取ってきた。日本において未だ「COP」という会議を知らない・聞いたことがない人が大きな割合を占める中で、多くの人が目にする「メディア」がCOPに関してどのような発信をするかは、人々の関心を高める・知識を深めるという点において非常に重要になると考えたからだ。

COP後である今感じているのは、記者の方々の問題に向き合う真摯さである。皆さん口を揃えて「これからはもっと“解決策提示型”の報道にしていくべき」と言っていた。コミュニケーションを取るまでは、読者からの需要ばかりを気にしているのではないかなど正直少し懐疑的であった。しかし、そこにあったのは「どうすれば効果的にメディアの力を使えるか、問題に対してメディアは何をできるのか」を考え続けている姿であり、見方が変わった。

多岐にわたる分野の問題を引き起こしている気候変動に対して幅広く専門的な知識を身につけ、正確に分かりやすく報道することの難しさを目の当たりにし、CYJなどのNGO団体が行う情報の発信などに関しても改めて考えさせられるきっかけになった。



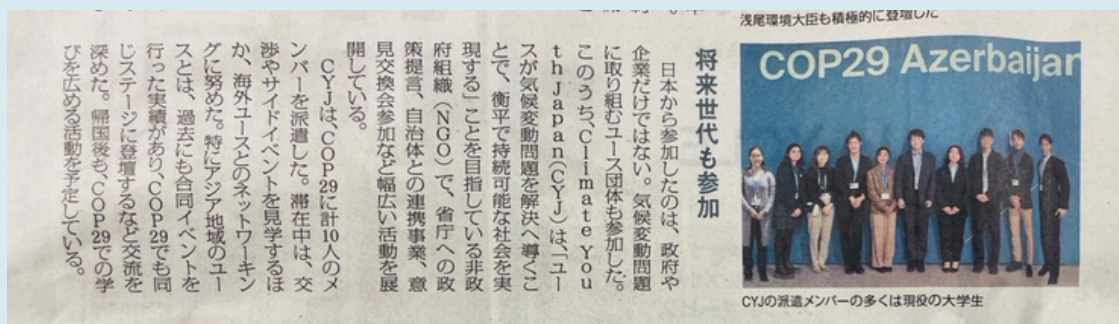
毎日新聞「ともに -共生社会へ-」
(2024/12/29)



BS朝日「地球クライシス」
(2024/12/28)

<https://youtu.be/M22C1g7i14E?si=ApCV5BCvp3ajyF13>

日経新聞
「COP29の風」
(2024/12/24)



4. SNSでの発信



国内SNS

チームメンバー

井艸、井畠、栗山、豊田

国内チームは4名で活動した。派遣前には、団体のSNSでCOPやCOYの基本知識を発信した。また、COP29の会期中は派遣者の活動や学びをSNSで広報し、多くの方にCOPの重要性やCYJの取り組みを伝えた。メインで発信を行ったInstagramでは、13の投稿に対して計500を超えるいいねが集まったが、COP以外との注目度の差は小さく、広報の改善が今後必要であると感じた。この経験を踏まえ、さらなる学習や協業に取り組むとともに、自身のCOP参加の意義を明確にし、来年度の派遣に備えたいと考えている。



現地の様子を
ストーリーで発信



COP期間中
にも投稿



COP直前に
派遣者紹介や
COPにまつわる
情報を発信

6

感想と学び

このセクションでは、派遣メンバーの感想と学びを共有する。参加した理由や現地での活動、ユースへのメッセージなどを載せている。以下が感想と学びの一覧である。

「信念を持って気楽に活動すること」	関口政宗
「COPは大きな糧となる経験だった」	中嶋彩香
「社会における自分の役割を再考する機会」	山田健二
「活動で大事なものは体力切れにならないこと」	和田優希
「自分と異なる論理を理解するために」	加藤弘人
「葛藤してみよう」	豊田さら
「ユースとしての機会への感謝と恩送り」	高橋櫻
「みんなでお茶を飲もう」	金武朝陽
「私たちの持つホリスティックな視点」	山本りら
「ユースの意義は存在しつづけること」	富田凜太郎

信念を持って 気楽に活動すること

“ユースとして活動する以上、責任はない分より信念を持って楽しく気負わず活動する方が良い”

関口 政宗



参加した理由 | ユースの活動、交渉における科学の役割

私の参加した理由は三つある。まず第一に日本でユースが活動しやすくするために何が必要なのかを他国と比較することで見つけることである。これは日本国内にはわからないことであり、他のユースと関われるCOY・COPはよい機会である。第二に交渉における科学の役割を考えるということである。現在科学者を目指す自分にとって交渉と科学の関係というのは重要であると考えている。最後に交渉に際しての日本の立ち位置、発言力に関して一次情報を得るということである。

現地での活動 | スポットライトを当てる場所を判断するための科学

それらの目的を達成するために現地では、youth engagementに関するアンケート調査、youth councilの情報を集めるためのアンケート調査、交渉を追跡するというを行なった。調査に関して驚いたのはアジア地域が最もユースの意見を反映する仕組みが整っていないということだ。COYではいわゆる環境先進国出身者よりもグローバルサウスのようないわゆる発展途上国地域の方が参加者として多かった。出発以前はグローバルサウスにはそのような仕組みがない傾向にあると思っていたのだが、アフリカの多くの国はユネスコなどの支援を受けてしっかりとした制度作りが行われているようだった。交渉ではImplementation of the response measureという議題を追っていたのだが、日本の発言は一切見られなかった。これは個人的な意見だが、おそらくそこにいた交渉官はこの議題に対しての知識が殆どなく、参加していない時もあるほどで、存在感が全くなかった。このような状況になっている原因は定かではないが、非常に危険であり、日本のためにもすぐに変えなければならないという危機感が生まれた。

交渉において科学は主張の根拠として使われるだけでなく、現状で重要である分野を特定するための判断材料としても使われているということが分かった。実際にOpening PlenaryではOceanが科学的に重要であるというカナダの発言があったように議論の出発点となるという発見が得られた。

他にもCOP現地での機会を利用して様々な方とお会いした。IGESの交渉官の方や大学関係者、省庁の方などと意見交換を行なった。私は現在のユースのあり方やユース組織の継続性というものに対して疑問を持っていたのでそれに関して率直な意見を伺ったところ、あまりユースに否定的な意見はきかれなかった。社会風潮的に気候変動境界では否定的なことがいいにくい環境であり、大人のユースに対しての意見が画一的になっていることに少し違和感を感じた。

ユースへ伝えたいメッセージ | ユースが楽しく気負わず活動すること

COYやCOPに参加して思ったことは、海外のユースも日本のユースと大して変わらないということである。私は各国を代表してきている人が多いということから、海外のユースには気候リーダーのような人がたくさんおり桁外れたリーダーシップがあるのだと思っていた。しかし実際は予想とは全く異なり、気候変動の知識を豊富に持っているもののリーダーシップに関しては日本のユースと大差ないという人が多いことに気づいた。COPに実際に参加すると、ユースという立場にあることで、自分が1人で努力するだけでは通常関われないような方々とお会いでき、その他にも多くの貴重な機会を得ることができた。私としては、ユースとして活動する以上、責任が小さいという特性を活かし、信念を持って楽しく気負わずに活動する方が良いと考えている。

今後の目標 | CYJの組織体制を考えていく

今後の活動としては、ユースの活動というのは非常に流動的で変化するという側面があるため、普遍的に活動がしやすくなるシステムをCYJに導入したいと考えている。また、組織体制もユースの強みを最大限活かせるようなものにしていきたい。日本にはユースの意見を反映するための仕組みがないため、不安定な意見交換しか行われていないという現状がある。そこでYouth Councilというものを設立するための努力を続けていかねばならない。またそのためには他団体との連携を増やし、影響力の拡大と意見の集約を行い、代表性をあげていくことが必要である。これらの活動を今後は力を入れてやっていこうと考えている。



コラム



COP29のお土産は...



COPの交渉は、200人が食事をする場所を決めようとしている状況に例えるとわかりやすい。主にネットワーキングの場となっており、私も多くの興味深い出会いがあった。交渉ルームでの議題に追いつけなくて頭をかいてた時、隣の人が丁寧に説明してくれた。彼の環境法律の長い経験を用いて、交渉の進め方をはしごに例えながら通訳してくれた。COP会場へのバスでは、健康セクターから来ている人の話を聞く機会があったり、帰り道に話していた人から研究企業の打ち上げディナーに誘われたりした。同じ気候変動に関心を持つ人が多く集まっているものだけれど、気候変動への扉がたくさん存在し、関わり方の多様性を実感した。COPのお土産は、多くの出会いと……コロナだった（笑）

（山本）

COPは大きな糧 となる経験だった

“自分が進みたい道を詳細に定められたわけではないが、今後につながる大きな糧となる経験をCOPでできた”

中嶋 彩香



参加した理由 | AFOLU分野、キャリア形成に必要なこと

私がCOPに参加した理由は4つあり、以下の通りである。

- ①COPでの交渉におけるAFOLU分野のプレゼンスや現在交渉されている内容を学び、国際的にAFOLU分野の気候変動対策及びその他の環境規制が今後どのような方向に向かうのか、日本としてどのように対応するべきか考える材料とする。
- ②日本のように気候変動問題≒エネルギー問題になっているような、気候変動対策というエネルギーばかりがニュースなどで取り上げられる/気候変動対策としてエネルギー分野の対策が多く議論される傾向は他の国にもあるのか、先進国特有のものなのか、それを変えていこうという風潮はあるのか調査する。
- ③若者がキャリア形成の中で気候変動対策への貢献ができる社会にするには何が不足しているのか他国ユースと話す中で考える。
- ④自分のキャリアとして農業(Agriculture)分野で気候変動問題に寄与する方法を生み出しながらルールメイキングにも携わる手段を考える。

現地の活動 | 農業(Agriculture)分野のイベントが想像以上に開催されていた

理由①に関しては、オープンな場で行われているAFOLU分野の交渉はREDD+に関するごく一部の交渉だけであったこともあり、あまり達成できなかった。ただ、気候資金のわずか2.5%しかAFOLU分野に充てられていないことなどからも想像がついていたことだが、AFOLU分野の気候変動の文脈におけるプレゼンスの弱さは身をもって感じた。

理由②に関しては、概ね達成できたと思う。多くの先進国と、原油などの資源産出国ではやはりエネルギー問題が気候変動問題の中核として取り上げられ、議論されているようで、それはGHG排出に占めるエネルギー部門の割合や、産業部門と比べた時のステークホルダーの多さからも違和感がなかった。ただ、その国の産業構成により排出削減の主要ターゲットに差異が生じているように感じた。また、特に途上国では、気候変動といえばまず『緩和』ではなく『適応』が優先される印象を受けた。

理由③に関しては全く達成できなかった。他国ユースと接する機会が前半メンバーより遥かに少なかったからというものもあるかもしれないが、何より初対面に近い人相手に英語でキャリア形成という抽象度の高いテーマについて深く議論するだけの力が私になかったからというのが理由として大きかった。

理由④に関しては、COPに行く前よりもかなり前進できたのではないかとと思っている。正直にいうと、COPに行く前は「Agriculture分野は国家間交渉もあまり活発ではないどころか、パビリオンでもあまり扱っていないのではないか。COPにきている人の中でAgriculture × Climate Changeに関心が高い人は果たしてどれくらいいるのだろうか」と思っていた。しかし、実際現地に行ってみると、農業(Agriculture)分野に取り組む国際機関のパビリオンが複数あるだけでなく、各国パビリオンのイベントにもAgricultureをテーマとしたものが（エネルギーほどではないものの）予想より遥かに多く見受けられた。自由に活動できる時間にはこれらのイベントによく足を運んだのだが、その中で世界には多くのAgriculture × Climate Changeに取り組む機関やグループ、イニシアチブがあることを知り、また実際にそれらの場所で働いている方々や所属していないものの研究者として協力をしている方々ともお話しすることができた。もちろん、全体で見たらこの分野は（少なくともまだ）世間から高い関心を持たれているとは言えず、自分が進みたい道を明確かつ詳細に定められたわけではないのだが、今後につながる大きな糧となる経験をCOPでできたのは間違いのない。

ユースへ伝えたいメッセージ | 一緒に考えてくれる仲間が欲しい

感想にユースへのメッセージを盛り込むようにとのお達しが出ていたので色々考えたのだが、結局これ！というメッセージは思いつかなかった。COPを通して気候変動問題にユースはどう関わっていくべきかの自分なりの答えを出すはずだったのに、逆にCOPに行ったことで迷うようになったからである。

「体感として、COP会場にいてもユースが国際交渉に影響を及ぼしているとは思えないが、じゃあ影響を及ぼせるようになることがユースたちの活動の「成功」なのか？もし同じくらいの熱量を持っている専門家ではない大人とユースがいたとして、「ユースだから」という理由でユースの声が優先して政治に届けられるのは「正義」なのか？自分の興味を全力で追求するのではなく、大人への怒りや不信感から政治的活動に駆り立てられるということは健全ではないのではないのか？もしそうならユース参画は「正義」ではなく「必要悪」ではないか？」そんな声がずっと頭の中で轟いている。ただ一つ言えるのは、こういったことを議論し最善を考える仲間が（少なくとも日本では）まだまだ足りないということである。ここまで読んでくださったあなたが、私たちと共に考えてみてほしいなと思ってくださったなら、それほど嬉しいことはない。



コラム

COP29のボトル



COP会場では、1つのバッジにつき1本のボトルと交換することができました。そのボトルにはCOPらしいデザインが施されており、会場全体に一体感を生み出していました。また、会場のいたるところにウォーターサーバーが設置されており、配布されたボトルと組み合わせて利用することで、ペットボトルの消費を抑える取り組みが行われていました。

このボトルはプレナリー会議などの配信映像にも映り込んでいるので、ぜひ探してみてください！

(山田)

社会における自分の役割を再考する機会

“全体を俯瞰し、広い視野を持つことは、活動のモチベーションや将来の可能性を広げるための基盤となる”

山田 健二



参加した理由 | 気候変動とのかかわり方、交渉の現場を知る

COP29に参加した理由は2つある。1つ目は、今後の気候変動への関わり方を明確にするためである。修士課程の学生として、キャリアや留学において何を学ぶべきかを見極めるため、以下の3点を明らかにすることを目的とした。①自分の専門や研究が気候変動においてどのような役割を果たしているか、②他国のユースが気候変動に対してどのようなモチベーションやキャリア展望を持っているか、③ユースや非政府アクターとしての立場、そして自分自身の役割を理解することである。2つ目は、国際交渉の現場を直接見ることである。国際交渉において非政府アクターの重要性が高まる中、その実態を現場で直接見て理解することを目的とした。

現地での活動 | 技術に関するイベント、キャリア形成を考える機会にも

現地では、韓国パビリオンでの登壇、専門分野のパビリオン見学、交渉の追跡、日本からの参加者との交流を行った。韓国パビリオンでは、韓国・香港・ベトナムのユースと共に、各国の気候資金や国内の気候変動対策、ユース活動について紹介し、パネルディスカッションを実施した。特にベトナムのLCOYの規模には驚かされ、日本でもユースの気候変動への関心を高めていきたいと感じた。

次に、専門・研究分野に関するパビリオンについて述べる。私の専門は技術経営であり、研究では電気自動車（以下EV）の充放電アルゴリズムを対象に、EVをバッテリーとして活用することで電力グリッドへの貢献（以下V2G）の最大化を目指している。専門分野のパビリオンで印象的だったのは、中国パビリオンとアメリカパビリオンであった。COPでは通常、日ごとにテーマが設定され、そのテーマに関連したパビリオンが開かれるが、中国パビリオンでは独自に日ごとのテーマが設定されていた。Enterprise Dayでは、中国がサーキュラーエコノミーへの移行に国を挙げて取り組んでいる印象を受けた。資料の中で、CEの基本的な概念であるバタフライダイアグラムを示しながら、3Rから10Rへの移行の必要性を共有し、技術とビジネスモデルの両面で事例を紹介していた。一方、日本パビリオンでは、CEを達成するための優れた技術の紹介はあったものの、そのビジネス応用に関してはあまり触れられていなかった。また、アメリカパビリオンではScope 3の測定に向けて、政府自らがScope 3を測定し、その削減を目指す姿勢が示されていた。国内の動きを強めるために、まず自分たちが先導する姿勢は参考になると感じた。

研究分野であるEVについてのパビリオンは、あまり見られなかった。天然資源の少ない日本では、再生可能エネルギーを最大限活用するために、EVや蓄電池の活用が注目されているが、世界全体で見る、それほど大きな関心が寄せられていないことが分かった。またV2Gでは、行動が予測しやすいバスやトラックからの活用が検討されていたり、消費者教育と中央制御を組み合わせるアプローチを取っていたりと、自分の研究との違いを見つけた。交渉は非公開で行われることが多く、残念ながら期待する学びを得ることはできなかったが、現地でプレナリー会議に参加できたことは良い経験であった。

また、日本からの参加者との交流では、CYJの今後の活動に関する相談や、個人的なキャリアの相談に親身に乘っていただき、貴重な経験となった。特に「次の世代に何を残したいか」という視点を持ってキャリアを形成すると良いのではないか、というアドバイスは胸に響いた。現在の私はユースとして上の世代に要求をする立場であるが、同時にまだ見ぬ下の世代の期待を背負っているのだという自覚が強まった。

ユースへ伝えたいメッセージ | 自分の役割を俯瞰して考えよう

ユースに向けて、2つのメッセージを伝えたい。1つ目は、自分の役割を俯瞰して考えることの重要性である。COPでは、自分の専門分野や非政府アクターの動きを肌で感じ、社会における自分の役割を再考する機会となった。全体を俯瞰し、広い視野を持つことは、活動のモチベーションを維持し、将来の可能性を広げるための基盤となる。2つ目は、JICAについて学ぶ機会を増やすことである。他国の参加者と交流する中で、JICAが日本の国際支援の象徴として認識されていることを強く実感した。ユースとして国際舞台で活躍するためには、JICAについての知識を深めることが重要である。

今後の目標 | 事前勉強会の内容を充実させたい

今後は、次回以降のCOPやその他の国際会議に参加するCYJメンバーのために、International Conference準備会の統括として、準備内容をさらに充実させたい。また、個人としては、今回の経験を通じて脱炭素ビジネスへの関心が一層深まっただけでなく、ファイナンスの側面にも新たな興味を持つようになった。これらを踏まえ、来年予定している留学では、これらの分野を重点的に学びたいと考えている。

最後に、COP事業にご協力いただいたすべての関係者の皆様、そして事前準備から現地での活動まで共に乗り越えてきたCOP派遣メンバーに、心より感謝を申し上げます。本当にありがとうございました！



活動で大事ななのは 体力切れにならないこと

“「こうなれば解決」と言えるようなゴールがない問題だからこそ、自分はどういうアプローチで、どのような距離感で問題に携わりたいかを考え、体力が切れないように意識することが大事”

和田 優希



参加した理由 | 国際会議の場における「コミュニケーション」を学ぶ

1つ目は、政策の合意形成過程を現場で客観視することである。私はこれまで国内の環境政策に対して提言を行う活動をしてきた。CYJのメンバーや他団体のメンバーと「どのような政策を提言するか」「どのような方向性でアプローチをするか」を話し合いをする中で、意見の相違が生じることも多々あった。同じ国で育ち同じ問題に関心を寄せている同世代のメンバー間でも、合意形成をするのは容易ではなかったため、地形も経済状況も課題に対する考え等も違う国同士でどのようなコミュニケーションを通じて合意形成が行われるのかに興味をもった。

2つ目は、他国ではメディア、特に気象予報の時間で気候変動がどのように取り上げられているか調査することである。日本では「異常気象」の報道はされても、「気候変動」について詳しく報道される機会は依然として少ない。特に、現在進められている環境政策と関連づけて報道されることは極めて少なく、「起きていること」と「それに対する対策」の間に空白がある状態でそれぞれ報道されていると考える。これは日本だけの特徴なのか疑問に思い、環境先進国であるヨーロッパの人々を中心にインタビューを行いたいと考えた。また、COPは気候変動関連で最も大きな国際会議であり、各国メディアも動く。現地に参加することで、他国のメディアがどのような熱量で何を報道しようとしているのかを直接知りたと思った。

現地での活動 | 客観視することで得た知見

1つ目に関して、COP派遣前勉強会で自身が担当したことがきっかけで興味を持ったパリ協定6条の交渉を中心に追った。会場のキャパシティの関係で交渉ルームにはほとんど入ることができず、別室でオンライン視聴（接続不安定）という環境だった。そのため、国際的なユースネットワークであるYOUNGOの6条ワーキンググループで情報を得ることが主な手段となった。ユースの中でも「まずは機能させること」を優先するべきだと考える人、「懸念点が残るまま締結するのはリスクである」と考える人など様々であった。実際、交渉は延長日まで続き、最終的な合意形成には時間がかかった。それを見て合意形成の難しさを再認識するとともに、非常に重要なプロセスであるということも実感した。結果的に6条は締結し、完全運用化が決まった。なお、懸念点として最も声が上がっていた「透明性・環境十全性」に関しては文言が何度も修正・追加されるなど、運用が開始した後も十分に監視を続けていくという姿勢が伝わった。これを受け、むしろ意見に対立がある方がより良い政策に近づけるのではないかという見解に至った。自分自身、今まで意見が対立することをどこかで恐れ、同じ意見であることの方が活動する上でスムーズだと感じてしまっていたことを反省した。政策提言部門の統括として、これからの活動を考える上で「ディスカッションの際に対立を恐れず意見が言える環境」「より良い政策を作るためのプロセスであることを周知した安心感のもとにあるディスカッション」を作って行きたいと強く感じた。

2つ目に関して、パビリオンエリアで「気象予報の時間に気候変動問題のことがどれだけ取り上げられているか」を調査した。私は将来、気象キャスターとして気候変動問題を身近な気象と絡めて伝えるような仕事がしたいと考えている。そのこともあり、他国での事例調査を行なった。結果としては、環境先進国であるヨーロッパでも「ほとんど取り上げられていない」となった。驚きながらもインタビューを続けると、多くの人が「今は事実ベースでしか伝えていないが、もっと取り上げるべきだと思う。」と回答した。日本だけの特徴ではないことを知り、気象予報の在り方を考え直すとともに「直接的な被害があまり顕在化していないからこそ」なのかもしれないと感じた。国をあげてこれからも長期的に取り組んでいかなければならない問題であるため、国民全体が政策を受容・検討できるぐらいのリテラシーをつけることが重要であると考えた。そのため「メディア」という手段は、今後さらに有効活用できるポテンシャルを秘めていると考える。この調査を通じて、自分自身の在り方についても考える必要があると感じた。

ユースへ伝えたいメッセージ | 「ゴール」がない問題を目の前にして思うこと

環境問題や気候変動問題に取り組むにあたり私が最も重要だと考えることは「自分が体力切れにならないこと、人を体力切れにさせないこと。」を常に意識するということだ。

体力が切れると自身の健康維持にも影響を及ぼすだけでなく、視野が狭くなってしまう。COPなどの国際的な集まりに参加すると、気候変動によって多くの被害が出ていて苦しい思いをしている人が沢山いる現状や、今後さらに酷い状況になるかもしれない等の不安や危機感が更に増すきっかけとなる。それと同時に、世界規模での行動が求められるという現実にも直面する。自分にできることの小ささに悲観したり、楽観的な他者に対して無力感を抱くこともあるかもしれない。だが、環境問題や気候変動問題は「こうなれば解決」と言えるような「ゴール」がない問題であり、これからもずっと考え続けていく必要がある。だからこそ、自分自身の人生を生きることも忘れてはならない。自分はどのようなアプローチで、どのような距離感で問題に携わりたいかを考え、体力が切れないよう心の健康も意識することが大事だと考える。

今後のCYJにおいても、活動をすることは悲観的なこと、というような構造にならないようにしたい。責任のベクトルを自分や他の個人に向けるのではなく、諸問題のボトルネックを考え続け、根本的かつ客観的な政策提言ができる組織を目指したい。



自分と異なる論理を 理解するために

“自分とは全く異なるバックグラウンドを持つ
人と話すことで、日本に対する印象や気候変動
そのものに対する見方も自分の中でアップ
デートすることができた”

加藤 弘人



参加した理由 | 海外から見た気候変動を知る

私がCOPに参加した目的は、文書には残らない交渉の現場ならではの経験を得ることと、海外の人々が気候変動をどのように捉えているのかを知ることであった。前者については、残念ながら十分な成果を得ることができなかった。予定していた交渉は見学に行った時点で既に終了しているか非公開であったからである。しかし、後者の目的についてはさまざまな形で達成することが出来たため、ここでは後者に着目して報告することにする。

現地での活動 | 気候変動をポジティブに捉える見方もある

日本国内に住む私はこれまでに日本国内の気候変動政策について考える機会が多かった。そのため、日本が世界の中でどのような立ち位置にいるべきなのか、あるいは海外では気候変動がどのように捉えているのかについて、十分な視点を持っていないと感じていた。そこでCOPという場を通し、自らの視野を広げるための活動を行った。その結果、私自身の日本に対する見方が変えられ、また特にアフリカの国々が気候変動をどのように捉えているかについての新しい示唆が得られた。以下では具体的に私が聞いた話の内容と、そこから得た考察を述べる。

現地では、他国のパビリオンに訪れることや、登壇の機会、ホテルと会場の行き帰りのバスの中の時間などを通じて、様々な人と話す時間を作ることが出来た。私が訪れたパビリオンの中で最も丁寧な話をする機会を設けてもらったのはタンザニアである。話を伺いたいと受付の人に話しかけたところ、交渉官として参加している方と1対1で話す場を設けてもらうことが出来た。彼の一番のメッセージは、気候変動を『発展の絶好の機会』として捉えていることであった。COPの交渉では先進国vs途上国という構図が強調されがちであるが、パビリオンでは商談などの機会があり、それを有効活用しているということであった。そのかなり前向きな姿勢に驚かされた。また、日本に対しても技術移転を積極的にしているという評価であり、かなり好印象だった。もちろん、話を聞く相手によって見解は異なるだろうが、交渉官も、交渉における国としての権利を主張するという任務と、それ以外でCOPという貴重な機会を存分に活用するという任務を両方持っているというところは意外であった。

ナミビアのパビリオンには「アフリカでトップの再エネ国になる」というスローガンが掲げられており、担当の方によると2030年までにそれを実現させるための目標が既に作られているようだ。特に水素エネルギーのポテンシャルが大きく、「再エネの輸出国になるためにまさに動き出している所であるから、これからは希望であふれている」という声も聞くことができた。

いずれの国も、被害が出ているから支援を訴える、あるいは被害が出ているから適応などの必要性を訴えるという方向性ではなく、成長の可能性があるからコラボレーションしたいという前向きな姿勢であり、それは私がイメージしていたものとは全く異なるものであった。

また、私が登壇の関係でよく訪れたシンガポールパビリオンでは、ユースの代表が20人近く参加しており、彼らの話も聞くことができた。私が日本の再エネを考えるとときは再エネに使える適地が少なくなっているという印象を抱いていたが、シンガポールはもっと狭いという話をされ、当たり前であるがそれが日本特殊の事情ではないということを改めて気づかされた。

さらに、各国パビリオンでのイベントに参加することで、さまざまな国の人々の意見を聞く機会を得た。このようにして、気候変動という共通の軸はありながらも自分とは全く異なるバックグラウンドを持つ人と話すことで、日本に対する印象や気候変動そのものに対する見方も自分の中でアップデートすることができた。ここで得たネットワークを途絶えさせることなく、日本にいても継続的に海外の人と交流する機会を作りたいと考えている。そのようにして日本国内に留まらない視点を持ち、新たな考え方で課題に取り組むためのきっかけを生み出していきたい。

私からユースに伝えたいのは、「異なる価値観に触れることで、想像力を豊かにする」ことの重要性である。気候変動は地球規模の課題であり、全く価値観が異なる国・人が全員で協力して立ち向かわなければならない課題である。

これまで気候変動に関心がなかった人は、自分の行動が気候変動という問題を通して間接的に離れた場所にいる他者に負の影響を与えていることを想像したことがあるだろうか。もともと気候変動に関心をもっている人は、自分が最適だと思う解決策と異なる意見を持った人がどういう思い・理屈を持ってその意見を支持しているかを想像したことはあるだろうか。

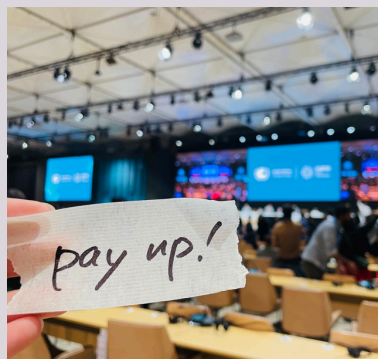
私はこのような想像をすることが、協力して共通の課題に立ち向かう最初の一步だと考えている。そしてそのような想像力を高めるためには、自分の価値観とは異なる価値観に触れる経験を繰り返すことが不可欠である。私自身、こうした経験がまだ足りないと感じている。それぞれに強みを持つ多様なユースがこのようにして想像力を豊かにし、気候変動という共通の課題に取り組める社会が実現することを期待している。CYJがその一助となれば幸いである。



コラム



COP29における市民社会の活動



市民社会が横断幕や拡声器を使ってアクションできる場所は決っており、それらは多くの団体が自分達の主張を強い感情と共に伝える場となっていた。最終日近い日にはPeople's Plenaryという市民社会の大きな集会が開かれ、Climate Justiceなどを訴えるコールや歌、スピーチなどが多く行われた。会場の外ではデモができないことから、会場を出る際に「Pay up! (気候資金の拠出を促すメッセージ)」と書かれたシールを口に貼るという行為で意思表示をするという試みが行われていた。

葛藤してみよう

“葛藤は決して無駄ではなく、「自分らしい」
かわり方を見つける手掛かりとなるし、将
来の気候リーダーは多面的なアプローチが求
められるからこそ、葛藤の経験は重要である”

豊田 さら



参加した理由 | 国際政治におけるエネルギーについての議論を体感

私が今回、COPへの参加を希望した理由は、気候変動問題における「国際平和」と「エネルギー転換における国際的リスク」に関してどのような議論がなされているのかを知りたかったためである。特に、日本国外からの視点を学ぶことに興味を持っていた。

現地での活動 | 資源が持つ地政学的リスクとユースの接点を知る、創る

現地のパビリオンでは「再生可能エネルギー」「重要鉱物資源」「地政学」「リスク」をキーワードに、各セッションでどのようなテーマが議論されているのかを調査した。国際会議の場では、これらに関する議論が複数行われていることを確認できた一方で、エネルギー移行の加速を妨げ得るリスクに対する具体的な対処について、十分な議論がなされているかどうかは断定できないと感じた。

また、派遣メンバーのご縁を活用し、「エネルギー移行の加速における地政学リスクと、それに対するユースの在り方」についてのセッションを開催させていただいた。異なる大陸のユース4人がこの分野に関心を示してくれたことは、このリスクの国際的な普遍性と問題提起の重要性の双方を示していると考える。

ユースへ伝えたいメッセージ | 自由と葛藤の狭間で気づきを

「所属に縛られない『自由』を謳歌せよ」、「葛藤してみよう」---これが、私からユースの皆さんへのメッセージである。

前者については、COYでの世界中のユースとの出会いと素直な対話を通して得た気づきに由来する。気候変動に消極的な方針を掲げる国、日本との関係性が良好とは言えない国、今でも情勢が不安定な国からきたユースと、「気候変動」という共通の問題意識に関して、それぞれが言葉を着飾ることなく、自分の思うままに議論する時間はCOYならではのだろう。国境を超える一体感と同時に、国や地域ごとの事情、被害の受け方や必要としているものの違いなど、気候変動問題の『解決』とは、一元的ではないという現実を改めて実感した。

後者については、自分に対するメッセージでもある。上記のセッションでの経験から、気候変動に関心のある日本のユースが解決策を講じるにあたって「目標を押し上げる」以外の役割も担ってよい、むしろ担うべき、という発見に基づく。加えて、日本のユースはより長期間にわたって気候変動の影響を受ける「被害者」であると同時に、先進国として多くの二酸化炭素を輩出してきた「加害者」であるからこそ、自分の立場に悩まされる人は多いのではないだろうか。私もその一人である。

この葛藤は決して無駄ではなく、「自分らしい」かわり方を見つける手掛かりとなるし、将来の気候リーダーには多面的なアプローチが求められるからこそ、葛藤の経験は重要である。

ユースとしての機会 への感謝と恩送り

“日本でのユースの地位を高め、得られるサポート・機会を増やし、それを当たり前”

高橋 櫻



参加した理由 | 交渉官へのアドボカシーとネットワーキング

私がCOP29に参加した理由は、派遣経験を活かした更なる活動の実現と、将来のキャリアも見据えたネットワーキングだ。具体的には、ハイレベルな方との意見交換である“bilateral meeting”への参加と、提言手交や会議内での発言機会などを通じた交渉官へのアドボカシー活動を行いたいと考えていた。私の関心は、炭素市場、小島嶼国、Nature-based Solutions(NbS)という自然生態系に関する分野のため、交渉ではパリ協定6条を、ネットワーキングでは炭素市場、海洋、モアナパビリオンという太平洋地域のパビリオンをチェックしていた。

現地での活動 | 不完全燃焼の1週間

現地では、中国パビリオンとGAUCパビリオンで登壇し、パリ協定6条の交渉やワークショップへの参加、関心分野のセッションに参加した。特に、パリ協定6条8項のワークショップが印象的で、各ステークホルダーの6条8項を通じた取組の紹介の後、少人数グループで発表者の交渉官やNGOの方と直接議論が行える構成で、フラットに質問や意見交換ができてとても有意義だった。また、CYJや個人的な繋がりのご縁で、省庁、研究機関、シンクタンク、起業家、教育機関、大学生・高校生の方々とお話しする機会にも恵まれた。

一方、パビリオンはブースの構成にゆとりがなく、セッション後にその場で会話をする雰囲気ではなかったり、天井が高いため、発表者の音声聞き取りにくかったりなどと、つくりの面で不満だった。そして交渉も、会議室の大きさが小さく、注目されている議題はオブザーバーが入場できないことが多々あった。そのため、交渉官と直接話すことも難しく、個人的には不完全燃焼のCOP1週間だった。しかし、これらのネガティブな意見はCOP27と比べて出てきたものなので、COP29単体で振り返ってみると、日常では会えない気候変動に関心のある同世代や実務者と繋がり、議論し、彼らの活動や考えに刺激を受けたりギャップを感じたりと、念願の再会と新たな出会いに溢れていた。

ユースへ伝えたいメッセージ | たくさんテイクしよう！

ありがたいことにこの2年間、ユースとして様々な国際会議に参加する機会をいただけてきた中で毎回感じるのは、日本と国際的な場における「ユースの地位の違い」である。国際的な場では、ユースは重要なステークホルダーで、ユースの声を聞くことやユースの活動を金銭的・能力的に支援することに多くの人が関心を持っていて、それらの場やサポートを提供することが当たり前になっていると感じる。しかし日本では、ユースの声を聞いてもらう機会、そのための活動資金や能力開発、すべて自分たちで1から開拓しなければいけない。もちろん、すべて自分達でオーガナイズすることで、様々な能力が付き大きな達成感も得られるが、諸外国と比べた「ユース」に対する日本の世間、そして若者自身の関心・期待の低さに虚しくなることがある。

私はユースとしてたくさんの機会を頂いてきたからこそ、視野・考え方・選択肢が想像していなかったほどに広がったし、将来自分がした経験を多くの若者が体験できるようにたくさんギブしたいと思うようになった。だからこそ、ユースに様々な機会・サポートが提供されることが当たり前で、その恩恵を受けたユースが大人になった時に、将来の若者世代に恩送りをするというポジティブな連鎖が生まれることが当たり前な世の中を作りたい。今後のCYJの活動では、そのような意識・制度改革を行う活動に注力していく。

みんなで お茶を飲もう

“土着の文化に親しみ、伝統が続いている理由
をより深く知ると「守りたいもの」に繋がる
のかなと思う”

金武 朝陽



参加した理由 | ユースの守りたいもの、大人の論理を知る

一般的に、ユースがCOPに参加するインセンティブは少ない。気候変動に取り組むことで得られる直接的な利益や、COPに参加することでもらえる何かがある訳では無いからだ。そこには、より多くを得たいというモチベーションではなく、現在ある「暮らし」を守りたいというシンプルな情熱があると思い、各国のユースの様々な具体例を探しに行った。また、それらユースの情熱だけでは動かないのが国際会議。時にトレードオフになる国益と地球益に対して、大人たちがどういう論理で立ち向かっているのかをこの目で見ようと考えた。

現地での活動 | 何が守れて何が守れないのかわからなくなった

「ユースの守りたいもの」について、各国のパビリオンを訪れて、雑談まじりに少しずつ聞いて回った。民族衣装は暑くても夏には着られない、水が足りない等、「自分たちが暮らす」ことが難しくなること、そして、雪が減ったら雪ヒョウが悲しむ、山火事があると動物が辛い、など「野生動物がかわいそう」ということなど、各国が抱えている具体的な問題を直接聞くことができた。

「大人の論理」については、いくつかの交渉を追った。各国の代表団の方たちが自国の現状を伝えつつ要求をし、議長国がそれを夜通しでまとめて朝の4時や7時に発表があるという形だった。最初の感想は「ちゃんと寝てほしい」ということだったが、196カ国の意見をまとめて合意するという超難題に対して全力で11日間も働いていたのかと衝撃だった。

最後のプレナリーでは、インドの交渉官が交渉結果に対して感情を露わに意見を訴えていた。「大人の論理」の中で「守りたいもの」が実現されないという現場を見て、何とも言い難い気持ちになった。もちろん、何年もかけて少しずつ前に進んでいるが、会議の途中で抜けていく途上国の交渉官たちを見ると、何ができて何ができないのかわからなくなった。

ユースへ伝えたいメッセージ | 急須でお茶を飲もう

「日本茶を飲もう」と伝えたい。今回私がテーマにした「ユースの守りたいもの」だが、特に日本のユースはそれがあまり具体的に無いのかなと思う。島が沈んでいくから避難する必要がある国と比べて、日本は気候変動によって失われるものがまだわかりづらい。しかし、日本にも少しずつ失われていくものは確実に存在する。私が通っていた京都の茶道教室では、2024年夏から先生方が着物を着ることを、必須から任意に変更された。滅茶苦茶に暑いからである。目の前で文化の消失が始まり、私はかなり危機感を覚えた。

自国の文化は、何百年もかけてその土地の気候に適応して生まれ、育っているものだ。私が提案したように、必ずしも「日本茶」ということでは無いが、土着の文化に親しみ、なぜこの形で伝統が続いているのかをより深く学んでいくと「守りたいもの」に繋がるのかなと思う。しかし、お茶は美味しいので、絶対飲んだ方がいい。

私たちの持つホリスティックな視点

“気候変動をホリスティック（全体的）に捉え、気候正義といった観点を交えながら議論を展開することができる”

山本 りら



参加した理由 | 交渉と気候に関する議論を可視化する

特に、気候分野における生物多様性の表現と、科学が政策にどのように反映されるかに関心がある。気候変動と生物多様性の損失の交差点には、喫緊の課題として興味深い反応を示している。しかし、私たちはこれらを切り離して議論し、重要な情報を見逃している。生態学の視点で科学的知見に基づいたアクションを行い、双方を支持するユースの代表として、COPに声を届けたい。また、Civil Societyのスペースを活かして、CYJを含めたNGOとThink Tankの生態系がどのように結果的な活動ができるのかを考える。そして、CYJでの活動やCOPでの経験を糧に、将来の気候政策に貢献していきたい。

現地での活動 | 「食料」と「自然」

温室効果ガスの11%（また、NOx排出の65%）を占める家畜セクターに焦点を当てたのは、主に「Action on Food Hub」で開催されたパネルだった。そこで、食料に関するディベートや農業分野における誤報について学ぶことができた。ビーガンのコミュニティと触れ合う機会もあり、非常に心強く感じた。一方で、自然と生物多様性についての議論は非常に少なかった。CBDの事務局に話しかけたところ、生物多様性と気候変動は「同じコインの裏表」であるという理解の仕方がある一方で、「同じコップの中の同じ水」のように共同存在しているとも言えるという説明を受けた。

印象的だったセッションのひとつに、「Making Nature and Climate Synergies a Reality across the Rio Conventions」というものがあった。このセッションでは、気候アクションにおける生態系の健全性（特に森林の重要性）を強調し、UNFCCCの条項6のような文書に生態学的（エコロジカル）な視点と言語を取り入れる必要性について議論が行われた。また、World Animal Federationの方との話では、気候変動の解決におけるクジラの役割について語られ、その内容に感動した。COPを経験して、生物多様性は、先住民知識や生物学を専門としない人々には十分に理解されていないと感じた。その重要性は、気候変動の「被害者」であるだけでなく、生物多様性の喪失自体が気候変動の要因となり、さらには多くの気候問題の解決策でもあるという点にある。こうした話を聞き、動物や自然の正義に関わりたいというモチベーションがさらに高まった。COP29は財政目標を達成できなかったが、来年の「Nature COP」に向けたリーダーシップへの期待は非常に大きかった。世界最大の炭素吸収源である海洋に、来年はより大きなスポットライトが当たることを期待している。

国際レベルの協力は、現実には競争が避けられないという矛盾に気づくことができた。COPを気候変動のオリンピックに例えるなら、スポーツが世界平和や人類の祝祭である一方で、国ごとに競い合う場であるように、COPも気候変動の緩和を目的としつつ、国々がそれぞれの主張を繰り広げる場となっている。気候変動の影響には（物理的にも経済的にも）不平等があり、さらに化石燃料産業からの圧力や気候レジリエンスの違いが存在するため、交渉の場にも不平等が生まれるのは当たり前のことだ。しかし国際レベルの交渉のあり方は、変わらなければならないかもしれない上、その一部として、科学的な代表性をもっと重視する必要があるだろう。現在の仕組みでは、IPCCのレポートを作成する中立的な科学者たちが、政策や行動計画を策定する国々にバトンを渡すことが基準だ。しかし、科学を巻き込む方法にはまだ多くの可能性があり、今後COPをどのような構成で開催すべきか、深く考えさせられた。

ユースへ伝えたいメッセージ | ユースの持つ強みは2つ

- ① SIDsとIndigenous Peoplesのそばに同感できるユース
- ユースは将来のステークホルダーとして、気候変動への危機感を抱いているグループである。Tuvalu（ツバル）は海面上昇により30年後には国土の半分が失われる島であり、ユースも直接的に将来を脅かされる立場にいる。これに対する不安と共に、真剣な意識を共有している。
- ② ホリスティック(Holistic)な視点
- ユースや学生は、まだ会社や政府に長期間勤めていない、もしくは比較的新しくその世界に入った立場であることで、既存の構造から自由が持っている。その結果、気候変動をホリスティック（全体的）に捉え、気候正義といった観点を交えながら議論を展開することができる。また、専門分野に偏りすぎることなく、多様なシナジーを把握しやすい立場にある。

今後の活動 | 日本のユース活動に大きなポテンシャル

- COYに参加したことで、LCOYの重要性を改めて実感した。CYJは政策提言やLCOYの開催に強みがあり、来年の日本でのLCOYの開催に携わることがワクワク！
- また、気候変動に取り組む日本国内のプロジェクトが協力し合っていて欲しいと思っている。日本のユースの機構認識が低いのと、ユース団体やプロジェクトに十分な誇りが感じられていないのがきっかけである。その一環として、日本全土のユース主導の活動を示すプラットフォームや地図を作成するのも一つのアイデアだ。
- 最後に、CYJは気候変動の分野で独自の立ち位置を確立しているが、アクティビズムや他の市民社会団体との協力といった、Climate Actionの他の形を探求したいと思っている。NGOの生態系を強化することが、私の個人的な目標でもある。



ユースの意義は 存在し続けること

“俯瞰的に見れば活動している事実そのものが重要であり、世代間不公正を意識させる契機になり得るからだ”

富田 凜太郎



参加した理由 | COP29部門統括として

私のCOP29参加目的は大きく2つある。CYJのCOP29部門統括として派遣者を支えることと、気候ユース存在意義の考察を深化させることである。

派遣メンバーが現地での学びを最大化できるよう、私はユース像の理解度を高めたり、各自の参加目的を言語化したり、現場の雰囲気を共有する時間を意図的につくったりしてきた。また、関係を築いてきたアクターとの連携を図ることに力を注いだ。これは現地での活動時に限らず、7ヶ月間にわたる準備段階も含まれる。各人の属性や持つ背景、価値観が違うからこそ、各人が学びを得るためには何の情報も、どのように伝えるかに長く時間を割いた。

それと同時に、気候ユースが存在することで、気候変動交渉やCOPに対してどんな影響や意義があるのか、その考察を深めることも目的であった。世代を越えた長期的時間軸で影響が波及する気候変動問題は世代間不公正が起きやすい（し、実際に起きている）からこそ、ユースは声をあげ、提言や活動をすると言われている。しかし、実際にユースがそのような動機付けを受けて活動している訳ではないというギャップが存在する。そこで、現地ではCOY19やCOP29のユース交流を通じて、問題意識に正面から取り組んだ。

現地での活動 | 気候ユースの存在意義に対する解をつかむことができた

その結果、統括という立場だからこそ得られた気づきと、気候ユースの存在意義に対する自分なりの解をつかむことができた。統括として、各派遣者と参加目的の言語化や現地での活動の方向性について派遣者一人ひとりと話し合ってきたが、同じ情報や考え方を伝えたとしても、各人で全く違う結論を導いていた。これは、よく「ユースはどう思うか」と年代で一括りにされることが多い身としては、改めてユースの多様性を再認識できた。

また、気候ユースの存在意義は、見える場所に存在し続けることだと考えをまとめた。直接ユースが交渉や政治に対して影響力を持つことは難しく、また社会全体としても、ユースが本来持つべき以上の影響力を負うような状況は脆弱性の表れであり、好ましくはない。^{*1} しかしい方で、世代間不公正は決して後回しにされる問題ではなく、常にその視点を持ちながら気候変動に取り組むべきである。そこで自分の中で出した気候ユースの意義の結論は「見える場所に存在し続けること」である。要は、意思決定権を持つ主要アクターが将来世代を意識した決定を行えるようになることがゴールであり、それにあたって将来世代に意識が向くような機会が作られればよい。^{*2} この考え方に立てば、ユースがどんな動機で気候変動に取り組んでいるかはあまり問題にならない。俯瞰的に見れば活動している事実そのものが重要であり、世代間不公正を意識させる契機になり得るからだ。したがって、ユースの動機づけと社会的役割の間にあるギャップはあっても問題ではないといえる。

付随して、ユースとしての意識とプロ意識についての学びも得た。日本では社会人になるにあたってCYJ含めユース活動をやめる人が多い。かたや海外に目を向けると、社会人として働きながらもユース活動続けるまたは、ユース意識を持って仕事に取り組んでいる人がある。*3 私は、日本では仕事を始めたらユースではなくなり、活動をやめ、意識を持つてはいけないという風潮がどうにも存在すると思う。しかし、プロ意識とユース意識の両方が自身の中に介在していても問題はないはずであり、時期や当人の重視する価値観によってバランスを取っていけばいいのではないかと。これは、どちらかしか持つてはいけないと思っていた自分としては新しい発見であった。同じ問題意識を共有している人にもこの考え方が伝われば嬉しい。

ユースへのメッセージ・今後の目標 | 自身のプロ意識を探りたい

今後は、CYJを通じてユース意識の深化と来年度以降のCOP派遣活動の情報共有・引継ぎを行うと共に、自身のプロ意識をどこに置くのか、CYJメンバーと議論を重ねながら、探り続けていきたい。これを読んで、ユースについて議論を深めたい、もっと知りたいという方がいれば、ぜひCYJに声をかけてみてもらいたい。

*1: この辺りの議論は、関口や中嶋の感想を参照。

*2: CYJではユースカウンシルの設立を活動目的の1つに掲げている。ユースカウンシルも、ここで述べる機会になり得る。

*3: 日本で「若手社員だから我々もユースだ」と言う日本人社会人もいるが、彼/彼女らはユース意識を持っていない場合（それがほとんどだが）、ここには含まない。



コラム

チョコを通じた市民社会



2年連続チョコの話をする。COPでは例年、1.5度目標の温度になぞらえて、交渉ルーム近辺でチョコが配布されている。チョコ自体は普通の海外の味がする板チョコだが、包装紙にアマゾン森林の重要性についての説明書きや温度目標値についての図表などが書いてあり、ある種の提言になっていて面白い。ぜひ、交渉官の方に会ったら、チョコを食べましたかと聞いてみてほしい。

(富田)

7

編集後記

COP29報告書を最後までお読みいただきありがとうございます。

COP29は過去最多レベルのメンバーを派遣したのですが、派遣者それぞれの多様な感想・意見を少しでも理解していただけたのではないのでしょうか。11月のCOP開催前から1月の報告会に至るまで派遣者間で様々な議論を重ねてきましたが、その一部でも皆様に伝わっていれば幸いです。

改めて、バッジをくださいました皆様、事前・事後の勉強会等でご協力くださった皆様、現地でお会いした皆様、そしてその他関係各所の皆様に、心より御礼申し上げます。

本報告書が日本のユースの活動に関心ある方々のお役に立ち、また日本国内の他のユースにとって良い刺激を与えられるものとなることを期待しています。



COP29への派遣、本報告書の作成は、
2024年度独立行政法人環境再生保全機構
地球環境基金の助成を受けて行いました。

